最晩年の良寛　（その２）貞心尼との出会い

藤原　道夫

貞心尼は 1798 年長岡生れ、幼名奥村ます。16 歳で医者の許に嫁したが、子ができないことを理由に 23 歳頃離縁された。美人だったという。柏崎にて仏の道や歌について学びながら貞心尼と名のり、後に長岡に近い福島（ふくじま）の閻魔堂に入る。５里ほど離れた所に住む良寛のことを前から聞き知り、直に話してみたいという願望が募って手紙を何度か出した。

望みが叶い、二人は秋の一夜を仏の道について語り明かす。良寛 69 歳少し前、貞心尼 29 歳だった。尼は良寛の人柄と見識に深い尊敬の念を抱き、礼状に次の歌を書き添えた。

君にかくあひ見ることのうれしさも　まだ覚めやらぬ夢かとぞ思ふ

これに良寛が返す。先ず夜更けの寒さを気遣い、そして自身の気持ちを詠う。

しろたえの衣手寒し秋の夜の　月中空に澄み渡るかも

夢の世にかつまどろみて夢をまた　語るも夢もそれがまにまに

その後一度与板で語り合う機会があり、以降は歌を添えた文通が続く。

良寛は 71 歳の夏頃から体調を崩し、秋には人に会いたくないと戸を閉ざして暮らすようになる。その様子を知った貞心尼から見舞いの手紙が届くと、良寛は歌を添えて返事を出す。

あづさゆみ春になりなば草の庵を　とく出て来ませあひたきものを

何と素直に心の中を表していることか！　この歌を後代多くの歌人が絶賛している。

１月末良寛重篤との知らせに、貞心尼は雪の積もった峠を越えて駆けつけた。良寛は心の内を吐露する。

いついつと待ちにし人は来りけり　いまは相見て何かおもはむ

貞心尼はそのまま留まり、献身的に看病する。良寛は下痢に悩まされていたので、下の世話もしただろう。良寛は今や病める一老人として尼に甘んじて身を託す。雪深い厳冬の 10 日間ほど、尼は看病をなし遂げた。

いよいよ良寛の臨終が迫っている時、居合わせた中の一人が「何か言い残すことはないか」と問うと「死にとうない」と応えたという話しもある。梵語の「阿」を示したとも伝えられている。そして 72 年と 3 か月の生涯を閉じた。次の辞世の句は、特に貞心尼と関連して、良寛最晩年の心境をよく表していると思う。

うらを見せおもてを見せて散るもみぢ